初期マルクス研究の意義

田　上　孝　一*

Significance of the Study of the Early Marx

TAGAMI Koichi*

キーワード：初期マルクス、『資本論』、疎外論、生きた労働と死んだ労働、怪物としての資本

マルクスに限らず古典的な巨匠の思想形成史を研究することはそれ自体で意義のあることだが、マルクスの場合は後に形成される巨大なマルクス主義思潮の源流として、その思想形成史の研究はまさにマルクス主義の原像を把握することに資するという、重大な理論的意義がある。しかしこう問うことは、ごく自然に新たな問いを喚起しないだろうか。

なるほどマルクスの思想を研究するのは確かに後のマルクス主義の源流を知ることに資する。だとしたらそのマルクスの思想は最終的に完成した形を受け取れば済むのではないか。少なくとも経済学ならば専ら『資本論』を学べばよい。哲学や歴史理論はエンゲルスの『反デューリング論』や『フォイエルバッハ論』がある。

もしこの標準的方法が正しいのならば、これ以外のやり方、とりわけ私が博士論文（『初期マルクスの疎外論――疎外論超克説批判――』時潮社、2000年）以来採用している、初期マルクスの中に『資本論』にも貫かれるマルクスの思想的核心を見出すような方法論は、独自な学問的価値を持たない好事家的な詮索主義の類でしかないだろう。しかしもしその核心である疎外論が『資本論』の哲学的な前提であるにもかかわらずエンゲルスによる体系化ではそれが明確化されず、エンゲルス以降のマルクス主義思潮ではむしろブルジョア的修正主義として批判に晒されていたとしたらどうだろうか。むしろこれまでのマルクス主義のあり方こそを大きく反省しなければならないだろう。そしてこれは仮定ではなく、事実だったのである。

ならばなぜ、初期マルクスの疎外論が『資本論』の中心的な方法であるにもかかわらず、これまでそれが一部の研究者にしか気付かれずに来たのか。この原因こそがまさに今述べたように、マルクスの思想を初期から晩年までその生成発展史を丹念に跡付けて、その発展の流れの中に『資本論』を位置付けてゆくような研究態度がマルクス主義者の間では希薄だったためである。マルクスは突然『資本論』の理論体系を思い付いたのではなく、若き日の思索を踏まえて、その延長線上に経済学批判の体系を結実させたのである。この事実から言えるのは、初期マルクスを研究することは一部の専門研究者の好事家的関心を満たすためだけではなく、マルクスの思想それ自体を理解するための必須の契機だということである。

では『資本論』にも貫かれる、初期マルクスの核心である疎外論的思考とはどのようなものだろうか。それは何よりも、資本の定義それ自体が疎外論に基づいてなされているということに代表される。

『資本論』においてマルクスは、読者の安易な理解を戒めるかのように、本のタイトルが『資本』Das Kapital とあるのに、肝心の資本それ自体の定義的説明を一目瞭然という形では記さなかった。マ

＊理工学部情報システムデザイン学系非常勤講師　Part-time Lecturer, Division of Information System Design, School of Science and Engineering

ルクスからすれば、粘り強く全体を通読吟味した読者にのみ真意を誤解なく伝えたいという意図なのだろうが、それがために『資本論』には資本の定義がなされていないという誤解を生むことになった。確かに『資本論』には資本の定義が誰にも誤解の余地なく分かるようには書かれていない。ではそもそも無いないのかといえば決してそんなことはなく、よく読めば分かるように書かれてあるし、同じ定義的説明が幾つかの要所で繰り返されている。

この点で注意を促したいのは、『資本論』と『国富論』の違いである。同じように偉大な経済学理論書でありながら『国富論』にあって『資本論』にないのは、唯一つのフレーズや一文でありながら大部の著作全体の真髄を伝えるものとされる箇所が、誤解の余地なく人口に膾炙している点である。言うまでもなく「見えざる手」のフレーズや「肉屋の博愛心ではなくて自愛心」の箇所である。では『資本論』には『国富論』のように、短い一文でありながら著作全体の真髄を伝えるような決定的な箇所はないのか。あるのである。ただそれが当然にそうだと広く認知されていないのが違う。しかし私が見るところ、次の一文こそがスミスの見えざる手に匹敵するような、『資本論』の真髄を伝える文章になる。

「人間が宗教の中で彼自身の頭の作り物に支配されるように、資本主義的生産の中では自身の手の作り物に支配される」(MEW Bd.23. S.649)。

この一文は残念ながらこれまでごく一部の研究者にのみ重んじられるに留まっているが、ここで訴えたいのはこの一文の圧倒的な明瞭性である。

ここでマルクスははっきりと、「資本主義とは〜である」という形で資本主義を定義している。資本主義とは人間が自分自身の手の作り物によって支配される社会だということである。そしてこの支配は、宗教の中で自分自身の頭の作り物、つまり幻想に支配されるのと同じ構造なのだという。言うまでもなく、宗教において人間が自己の幻想に支配されることを批判したのはフォイエルバッハである。このことは、我々を若きマルクスに連れ戻す。『ヘーゲル法哲学批判序説』の冒頭でマルクスは、「ドイツにおいて宗教の批判は本質的に終わっていて、そして宗教の批判は全ての批判の前提である」(MEW.Bd.1. S.378)と高らかに宣言した。これは宗教の批判に関してはフォイエルバッハに付け加えることはなく、そしてフォイエルバッハの宗教批判は全ての批判の方法論的前提だということである。つまりマルクスにとって批判とは、フォイエルバッハが宗教に対してしたように、自らが作り出した幻想である神によって自らが支配されるような現実を告発することである。それは人間が、自ら作り出したにもかかわらずそれとは知らずに自らが支配されるような現実を詳らかにし、その克服の方途を指し示すことである。

人間が自らの作り出したものによって支配される状態を指し示すカテゴリーは疎外である。マルクスにおいて資本主義とは、フォイエルバッハにとって宗教がそうであったように、疎外の論理によってその本質が規定されるような経済システムだということである。このことは勿論、『資本論』のマルクスがフォイエルバッハ主義者なことを意味しない。そもそもまだその時点ではまだフォイエルバッハ主義者だったと一般には誤解されてきた『独仏年誌』において既に、マルクスはフォイエルバッハの思想的立場を乗り越えていた。フォイエルバッハは宗教に人間の自己疎外を見たはいいが、宗教こそが人間的悲惨の原因とまでに、宗教を過大評価してしまった。しかし『独仏年誌』のマルクスは、宗教ではなくて宗教的幻想に逃げ道を見出さざるを得なくなるような現実社会の悲惨に真実の原因を求めた。その原因こそが後に社会の土台として明確化することになる経済的領域である。マルクスの批判がフォイエルバッハを踏襲しているといっても、それはマルクスの中心方法がフォイエルバッハ同様に疎外論であるところから来る論理的帰結に過ぎないのであって、その疎外論の内容自体はマルクス独自なものに換骨奪胎されているのである（マルクスの思想形成史については拙著『マルクス哲学入門』社会評論社、2018年、『マルクス疎外論の視座』本の泉社、2015年、参照）。

ともあれ、件の一文のようにマルクスははっきりと『資本論』の主要な理論対象である資本主義を疎外論の論理によって概念規定している。これはまさに資本主義とはその本質が疎外論によってこそ説明されるような社会だということを意味している。

マルクスが経済学研究を本格的に始めてすぐの時点で記した研究ノート群は後世に『経済学・哲学

草稿』としてまとめられることになる。ここでマルクスは、後の資本主義概念に相当する「国民経済学的状態」の中では労働者の生産物は労働者から疎遠になり、労働者によって獲得されずに非労働者によって私的に所有されるとした。こうして国民経済学的状態では労働ではなく私的所有が社会全体の原理となる。つまり資本とは労働者が生み出したにもかかわらず労働者自身から疎遠になり、自己運動的に蓄積して巨大化し、創造主である労働者をむしろ隷属させるような存在である。富を作り出す主体であるはずの労働者はむしろ客体化されて、労働者によって作り出された客体であるはずの生産物があべこべに主体となる。こうした転倒した人間関係が資本である。これではまるで怪物のようであるが、実際マルクスは次のように言っている。

「資本家は貨幣を、新しい生産物の素材形成者または労働過程の諸構成要素に仕える商品に変えることによって、商品の死せる対象性に生きている労働力を同化させることによって、彼は価値を、過去の、対象化されて、死んだ労働を資本に、自分自身で増殖する価値に、胸に恋を抱いているかのように、“働き”始める、魂を吹き込まれた怪物に、変える」(MEW Bd.23. S.209)。

まさに資本とは自分自身で増殖する怪物なのであり、その出自は労働者が対象化した過去労働である。この過去労働が「死んだ労働」と表現されていることには深い含意がある。過去は死であり、現在は生である。我々は死んでいるのではなくて生きている。ならば生きた人間の社会は、死ではなく生が支配する社会でなければならない。しかし資本とはまさに死んだ労働の怪物的転化なのであり、資本主義とは現在の労働者を過去の資本が支配する非人間的社会である。マルクスは既にこの核心を『共産党宣言』でつかみ、次のように提起していた。

「我々が望むのはただ、労働者が資本を増やすためのみに生き、支配階級の利害が必要とする限りにのみ生きているような、この獲得(Aneignung)の惨めな性格の止揚である。ブルジョア社会では生きている労働は、ただ蓄積された労働を増やすための手段であるにすぎない。共産主義社会では蓄積された労働は、ただ労働の生活過程を拡張し、豊かにし、満足させるための手段であるにすぎない。ブルジョア社会ではだから、過去が現在を支配し、共産主義社会では現在が過去を支配する。ブルジョア社会では資本が自立的で人格的であるのに対して、活動的な個人は非自立的であり非人格的である」(MEW Bd.4. S.476)。

マルクスが、つまり共産主義者が求めているのは自己目的的であるはずの労働が非労働者の手段となってしまっているような主客転倒構造の変革である。というのも、この資本主義では生きている労働は死んで蓄積された労働の手段でしかないからである。これは本来あってはならないことである。だから本来的な社会である共産主義では資本主義とは反対に死んだ労働は生きた労働の手段になる。資本主義のように死が生を支配するのではなく、生きた人間にふさわしく生が社会の支配原理となる。死んだ過去労働ではなく生きた現在労働が支配するのであり、現在が過去を支配するのである。

生きた労働者から生を奪う死の原理である資本は巨大な怪物としてあらゆる物を飲み込もうとする。つまり資本主義ではもはや「労働者が生産諸手段を使うのではなく、生産諸手段が労働者を使用する。生産諸手段は労働者によって彼の生産的活動の素材的諸要素として消費される代わりに、生産諸手段が労働者を、生産諸手段自身の酵素として消費する」(MEW. Bd.23. 329)。

資本とは労働者自身の手の作り物であり、それによって生産を実現するための手段として労働者によって生み出されたはずのものである。しかし過去が現在を支配する世界では逆に社会全体の総生産過程の主体へと転化している。資本となった生産手段は今や労働者を自らの生を維持するための消化過程に必須な酵素とするのである。まさに自らの創造主を飲み込み、それを自らを巨大化させるための必須の酵素としながら、無目的な蓄積衝動によって再現なく自己を肥大化し続け、ついにはその自壊を迎えざるを得ない怪物であるかのように、マルクスは資本を描いたのである。

まさに資本とは疎外された生産物の転化であり、資本の原因は労働者自身の労働の疎外なのである。

こうしてマルクスにおいてその主要な批判対象である資本主義が疎外論の論理に基づいて概念規定されていることが明確になった。このことは多大

な理論的意義を持つが、その一つとして挙げられるのは、資本主義の止揚としての共産主義社会がどのような社会であってはならないのかという理論的オリエンテーションが明確化されることである。

そもそもこれまでのマルクス主義の主潮流にあっては疎外論的なマルクス解釈は基本的に否定的に扱われ、それがために資本が疎外された生産手段であることが広く理解されなかった。このため、社会のあり方のメルクマールは疎外ではなくして所有にあるとされ、生産手段が私的に所有されているかどうかが資本主義とポスト資本主義を分かつ基準だとされた。

ここから社会主義とは生産手段を私的に所有することではなくて公的に所有することであり、公的な社会有とは国家所有であると広く理解されたのである。このため現実社会主義諸国家はまさに自らの社会が社会主義であることの証拠として、主要産業が国営企業によって運営されていることを喧伝していた。そしてこの論点に関しては、肯定する側も否定する側も大概その是非が問われなかったのである。しかしマルクスにあっては私的所有はあくまでも疎外された労働の結果であり、所有のあり方を原因である疎外と切り離して云々することは、理論的問題の本来の所在を見えなくする不適切な方法だったのだ。

ところがこの不適切な方法がむしろ一般的に広く採用されていた。このため原因である疎外の側に目を向けずに、結果である私的所有のみに社会の基本性格を求めたのである。こうして生じたのが、私的所有を法律上の形式としては否定していたにもかかわらず、実際には疎外を温存させ資本主義とは異なる形で労働者の疎外を再生産し続ける歪な「社会主義」だった。

実際旧ソ連社会では確かに生産手段の私的所有は禁じられ、資本主義でのような資本家は存在しなかった。しかし生産過程の支配権は資本家に代わって、資本主義における資本家同様に、労働者によってコントロールされない官僚とその上層部であるノーメンクラツーラに握られていた。この社会では労働者は資本主義同様に自らが生み出した生産手段を自らのものとして獲得(Aneignung = 疎外 Entfremdung の反対概念) することができなかった。現実社会主義は「労働者の国家」を謳ってはいたが、労働者には支配的な官僚層に対するリコール権が与えられていなかった。このため労働者は社会の名目的な代表者でしかなく、その生活過程は資本家同様に労働過程の外にあって生産過程を指揮する官僚層に支配されていた。現実社会主義は確かに資本家が存在していないという意味では資本主義ではなかったが、その実質においては資本主義同様の疎外社会だった。

まさに今後あるべき社会主義は、これまであった「社会主義」とは違った形で構想されなければならないことが、オリジネーターであるマルクスその人の理論から帰結する。ある社会が本当に資本主義を乗り越えた社会であるかどうかは、生産手段の所有形式のみの問題に還元されてはならない。生産手段が私的に所有されていなければ直ちに社会主義だとして、国家所有された生産手段を労働者によるコントロールを受けることなく恣にする官僚層が支配する社会は、決してマルクス本来の意味では社会主義ではない。マルクスのいう社会主義とは、資本主義のように労働者が自身の手の作りものによって支配されない社会である。資本主義では資本家が労働者の手の作り物を所有し、現実社会主義では官僚が所有した。いずれも社会主義ではない。現実社会主義は所有の原因である労働の疎外を不問に付して、形式だけで上辺を取り繕ったのである。

マルクスに基づく真の社会主義とは共産主義的解放に向けて、労働者が自らの手の作り物である生産手段を我が手に獲得し、自らの運命を自らの手で切り開くという、言葉の深い意味での自主管理原則を、資本主義や現実社会主義のような垂直的なヒエラルキー関係においてではなく、水平でアソシエーティヴな連帯の中で労働者が実現できる社会である。このようなあるべきポスト資本主義社会のオリエーテーションが、疎外論者としての原像を正しく理解することによって、社会主義思潮のオリジネーターであるカール・マルクスその人から導き出すことができるのである。2019年9月27日脱稿

付記　本稿は、2019年11月2日に大連海事大学で開催される「中日韓マルクス主義シンポジウム」での報告要旨を改稿したものである